

○日時

令和7年7月10日(木)10:00~12:00

○場所

オーテピア4階 ホール

○出席者

別紙出席者名簿のとおり

○開催内容

1 開会

県立図書館長あいさつ

議事録署名人の選出・・・久寿委員

2 議事

(1)第2期オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況及び次期計画の作成について

(2)その他

3 閉会

市民図書館長あいさつ

○議事録(※議事内容について事務局から説明後、意見交換)

議事(1) 第2期オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況及び次期計画の作成について  
(委員)

4点話をさせていただくが、オーテピアは高知県の課題について本当によく取り組んでいる。

1点目は不登校対策。私は、県や市の公的な相談機関で長年勤務し、教育相談と不登校について対応してきた。今回の説明の中に、不登校の相談会がこちらで開催されたとあった。不登校の子どもたちにとっては、静かで落ち着け、綺麗で安心して過ごせる空間があるオーテピア高知図書館なら行ってみようという心の居場所になる場所だと思っている。今、中学生で学校へ行ってないが、次は絶対みんなと一緒に高校へ行ってみようという準備期間に、とても重要な居場所になれると思っている。なので、このオーテピアで5月11日に相談会が行われ、保護者の方や本人がこういう安心できる場所があることを体験できる良い機会になったのではないかと思う。相談会の様子について伺いたい。

2点目は、オーテピア高知図書館は家庭の経済的な格差と貧困の連鎖を断つ重要な拠点だと思っている。前にも少し話をした外国語の絵本や教科書などは日本で手に入れようとすると高額だが、いつからか、こどもコーナーにイギリスで使われている英語の教科書がたくさん並べられ、多読の記載があって、読めるところを読みましよう、子どもたちにとっても分かりやすいアピールがされていた。書店では1冊が何千円もするものがたくさん並び、子どもたちが見たら、「あっ」と思うような仕掛けがされていて、そのことも大変うれしく思った。

3点目は、高知県の課題である高齢化が進んでいること。私が勤務しているふれあいセンターの近辺も高齢化率が非常に高く、図書館に来られる方のほとんどが高齢者の方で、なかには車椅子でおいでの方もいる。配送サービスが充実しているので、予約したオーテピアの本をふれあいセンターで受け取ることができ、ふれあいセンターのポストに返却できる。先ほど説明にもあったこの配送サービスは、経費がかかって大変だ

とは思いますが、オーテピアまで行くことが難しい方々の立場に立ったサービスが充実しているのは、図書館の努力のおかげだと感じている。

4点目は、少し苦言みたいになるが、GIGAスクール構想について。冒頭、電子書籍の閲覧数が減っているという話があった。小学校の情報担当の先生と話をする機会があったが、今、AIドリルがいろいろな学校で多くの先生によって大変盛んに使われている。それに対して、オーテピアの電子書籍は、最近は全然使っていない、使いにくいという話を聞いた。AIドリルとオーテピアの電子書籍の違いは何かと聞くと、ログインのしやすさだと言っていた。AIドリルは、子どもたちへ割り振られているタブレットを起動するときのIDとパスワードでそのまま起動する。ところが、オーテピアの高知県電子図書館は、一学年が多分2,300人なので、9学年だと約2万人の計算になり、2、3年前に2万人にIDとパスワードを割り振って、当時はみんなが期待して、アクセスして借りようとしていたようだ。最初の頃は、すぐに誰かが借りてしまって、他の人は(同じ本を)見ることができない状態が続いたので、だんだんとアクセスするのが遠ざかっていったと。授業中にアクセスしようとしても、子どもだけではつなぐことができないとなると、その対応に時間をとられるから、結局は使いにくくなる。毎日使っているパスワードで入れるAIドリルが使われるようになり、オーテピアの電子書籍は、学校現場で使われていないという状況。その先生は、最初のIDとパスワードが割り振られ、みんなが期待したときの雰囲気を取り戻し、今回新しく導入された読み放題パックを一斉に周知すれば、もう1回、電子書籍の利用が盛り返せるのではないかと話をしていた。

最後は苦言になってしまったけれど、総合的には、オーテピアの皆さんは本当によくやっていて、市民・県民のために努力されていると感じている。

(事務局)

不登校相談会の様子について少しご説明させていただく。5月11日の日曜日の9時半から12時にグループ室4で実施した。相談に来られたのは2組で、1組は小学生の子どもと保護者。もう1組は保護者のみ。最初の1時間半ほどでその2組が終わって、その後には相談者は現れなかった。会場には出前図書館として、子どもと一緒に来て待っている間に読める本や、親も読める不登校関係の本などを用意しており、小学生の子は相談の間、嬉しそうに本を読んで待っていた。用意した本もテーマに合った本ばかりで良かったと、相談員の方から褒めていただいたと聞いている。

(事務局)

4つ目のGIGAスクール端末での電子書籍の利用について、今のIDは、もともと子どもたちのGアカウントを利用する形になっている。なかなか使いにくいという声を今聞いたので、現実はどういった対応が可能であるのか、現場の先生の声も聞いてできる工夫をしていきたい。全体として見てみると、5年度から6年度にかけて毎月25%ぐらいずつ下がっていて、夏休みの8月も同じように25%下がっているような状況。逆に言えば、伸びしろはもっとあると思うので、使いにくさの改善も含め、より利用が進むように工夫をしていきたい。

(委員)

先ほどから話を聞いたときに、この計画の素晴らしい取組に感銘を受けている。貸出しや利用者が減少気味という話もあったけれど、これは県の施策、地域の課題、社会の状況と関連していて、少子高齢化といった状況の中で、私が一番興味を持ったのは4Sプロジェクト。コンパクトで質の高いことを計画しているということで、これからはこういう機能がどの市町村でも大切なことなので、具体的にどういう方向性を持っている

のかを教えてください。

2点目はビジネス支援。すごく素晴らしい。雇用について、どこの企業、場所でもかなり厳しい状況にある。そして、雇用が長続きするかというとなかなか長続きしない。その原因はどこにあるのかというところで、やはり自己との闘いや自己の考えというものを得るためにも、読書を通して人としての生きる力を培うところにも関連する、本当に素晴らしい取組だと思った。増やしてほしいと思う。

3点目は不登校。子どもの実情にもよると思うが、こちらの考えているとおりにはなかなか進まない実態があると思う。その中で、どういう工夫をしているのかをお聞きしたい。

あと、たくさんの支援、素晴らしい取組ができていけるけれど、オーテピアや高知市の分館・分室で、人が出向いたり、いろいろな活動ができるだけの人的なものは、どのようなものなのかお聞きしたい。

(事務局)

4Sプロジェクトとして、県では「消防広域化」、「周産期医療体制の確保」「県立高等学校の振興と再編」、「地域公共交通の確保」、「国保料水準の統一」を重点プロジェクトとしている。その他に、「公共サービスの確保」、「地域産業の持続性の確保」、「地域の活性化」をプロジェクトとしており、これから具体的な中身を進めていくことになる。図書館として行政支援に取り組んでいるが、個々のプロジェクトに対してどういう支援をするかということまでは、現時点では進んでいない。図書館も、組織としては県と市で共同運営することで、我々はもうスマートシュリンクができていっていると思っているので、これからスマートシュリンクへの関わり方としては、実際の県のプロジェクトがスムーズに進むように図書館としてもしっかり後押しをしていきたい、うまく絡んでいきたいと考えている。各サービスの担当があり、自分のところに関係するプロジェクトについて勉強して、それにしっかり寄り添って支援していく、そういう意識で取り組んでいる。

最後、人的な部分で言うと、まさに今回、県市の合築で運営の効率性を高め、その分で人的な余裕を少しでも生み出して、県であれば市町村支援を重点化し、高知市は分館・分室の支援にもしっかり当たっていくという配分については、共同運営することによってうまくできていると考えている。

(事務局)

図書館では基本的に資料の提供や居場所づくりという形での支援が中心となっている。

高知市教育研究所の隣に潮江分館があるので、そちらでもできることをやっていく。例えば、自分が読んだ本の紹介ポップを作って実際に書架に並べ、それを保護者と見に来て、自分が作ったものがこうやって役に立ってるんだということを見て、自信をつけていくというのも1つ大きな材料になっていると感じている。

私どもは、図書館を使ってできることを常に考えている状態なので、何かアイデアがあれば広げていきたいし、他の市町村の図書館に対しても、こういう取り組み方があることを周知していきたいと思っている。

(委員)

職員の皆さん、日頃から業務が大変かと思いますが、県民・市民のためにありがとうございます。

毎回、きめ細やかなサービス、業務をなさっていると感心して見ているが、2つほど思ったことがあるので話をさせていただく。

まず、オーテピアが開館して7年目になるということで、こちらが開館する時に、津波避難ビルとしての役割を果たすということがあったと思う。最近、地震が多くて、いつ南海トラフが起こるか分からないので、非常に不安な思いをされている方も多い。私は、子どもの学校で役員をしており、保護者から、地震が発生したときに学校にいたらどのように対応したらよいのかという声が非常に多くなっている。

日頃、職員の訓練やマニュアルがあると思うが、オーテピアは中高生の利用が非常に多く、土日は親子連れや年配の方の利用者も多く、地震のときの利用者への対応の仕方はどのようになっているのかを今一度お聞きしたい。最近、帯屋町で外国人も多く見かけるので、そういった方への対応も必要になってくると思うし、帯屋町にいるときに地震にあったら、オーテピアに行くのがよいのか、日頃から頭に入れておくことなども県民、市民の皆さんに知っておいていただいたらよいのではないか。

もう1つは児童サービス。県の生涯学習課から、高知こどもの図書館が受けている読書ボランティア講座の講師として、私は10年以上毎年依頼を受けていて、今年度も、この秋から室戸市、黒潮町と高知こどもの図書館で開催を予定している。このボランティアをしたいという方は、お仕事をリタイアされた方で、地域との関わりを持ちたいアクティブシニア層の方が、何か自分が役に立つことができればということで、読み聞かせのボランティアをされたい人が結構多い。課題として、「地域で読書ボランティアをしたい人が、団体や個人で活動できる仕組みづくりが必要」とあるように、地域差が非常にある。幡多の皆さんはすごく熱心で、非常に多くの方が講座に来てくださったり、仕組みづくり、組織づくりができていているところもある。一方で、読み聞かせのボランティアがあまり盛んではない地域もある。

先ほどおっしゃったように、新しい図書館も続々とできているので、読み聞かせのボランティアの組織づくりは、やはり各図書館が拠点となるべきではないかと思う。長年関わっていて、小学校や中学校へボランティアに行きたいという方を図書館で紹介できるシステムづくりがあったらよい。また、地域の人たちが、生涯学習やコミュニケーションが取れる場所として図書館の利用をされると、非常に意義のあるものになるのではないか。

#### (事務局)

前段の津波避難ビルについて、オーテピアでは火災訓練の他に、地震対策の訓練を年に数回行っている。訓練は開館日にはできないので休館日に行っているが、職員が半数体制の日が起こった想定とし、職員の半数を利用者役としている。身体障害者の利用者役や見つかりにくいところに滞在する職員もおり、さまざまなパターンを想定している。図書館ではBCP(業務継続計画)を令和6年3月に策定し、昨年度はBCPのブラッシュアップのために、高知大の先生のアドバイスもいただきながら、2月に机上訓練を行った。

また、ご指摘のあった商店街からオーテピアへの避難については、一昨年度から帯屋町商店街と連携して、年に1回、避難訓練を行っている。課題としては、実際に多くの方が避難して来られた場合、オーテピアとして受け入れ後、どう対応していくかというところがまだ十分にできていないので、そういったことも受けとめ、全体として津波避難ビルとしての機能が十分に果たせるようにしていきたい。

#### (事務局)

実際に避難されてきた方に対する備蓄品は、市の計画などと切り離して、3,000人分を非常階段の倉庫に置いている。そもそも、ここは中間層免震構造といって1階と2階の間に免震層があるので、想定される最大級の地震が発生しても建物は損壊しない想定で、この近辺では避難するときが一番安全な施設ではないかと思う。

皆さんどこへ行けばよいか迷われたときにオーテピアに来ていただければ、それなりに面積もあり、1,910人は収容できるようになっている。商店街で何かあったときには避難していただけるようにアピールも必要かと思う。非常階段のドアなども地震を検知すると、全部が開放するようになっている。出入りに関しても、さまざまな手段で上の方へ上がっていただける設備も整えている。非常用電源として発電機も準備している。全館を空調するのは難しいが、スマートフォンの充電ができることやラジオやテレビ、パソコンでの情報

収集を行えるようにする。それから、救護室は具合が悪くなった方のために冷暖房もかまえているなど、一時避難場所の設備としては充実しているのではないかと考えている。

#### (事務局)

後段の、アクティブシニア層を中心とした各地域でのボランティアとしての活動という点は、話にあったように、できれば各地域の図書館が拠点となって、活動の受入れなども協力してやっていくのが理想の形だと思う。実際にオーテピアに来れる範囲の方であればオーテピアでやっていただいたらよいと思うけれど、オーテピアまで来るのは難しい方がいると思う。新館整備された図書館を中心に、そういった活動もだんだんと広がっていると聞いており、その辺りについては、昨年度から毎月、県の生涯学習課とも情報交換会をしているので、県全域にそういった動きが広がっていくように取り組んでいきたい。

#### (委員)

この図書館協議会へ参加させていただいて、早くも7年経つかというのが実感。

まず思うのは、皆さんが手を抜いていないという印象。図書館は暗くて静かなところというイメージを勝手に持っていたけれど、最近、分室などへ行っても何か明るく感じる。ポップも年々派手になって、この本どうですか、これどうですかという展示物がいろいろあったりして、楽しい図書館のイメージがどんどんできてきた。私の50年以上の人生の中で、最近までユニバーサルデザインやバリアフリーという言葉は知られていなかった。私の先輩は腕が使えなくて、本のページを口でめくったという時代もあったので、毎年の感想として、すごく進歩してきてよいなど。

今日の報告を聞いて、今まではこちらからPRや啓発をするだけだったように思う。言葉は悪いが、攻撃的に、激しくPRしているというイメージで、言い方を変えれば、サービスを攻めている感じが、今日の報告からは読み取れたのでよかった。これからはそういう時代なのだと思う。

もう1つ良いことは、母国語が日本語でない人たちへのサービスや、私たちが関係する障害を持った人たちへのサービス。流行りの言葉かもしれないけれど、取りこぼしのないサービスを実現してくれているように思うので、ますます頑張ってもらいたい。オーテピア高知図書館へ来れば何でも情報があるということが、今、現実化してきていると思うので、応援しかできないけれど、ますます頑張ってもらいたいというのが私の感想。

#### (事務局)

確かに、昔の図書館は暗くて静かというイメージで、昔の県立図書館がまさにそういうイメージだったが、オーテピアに移転するにあたって、繁華街に近く、ある程度にぎやかな場所であることを標準として考えた。どうしても静かな空間が必要な人は静かに読書をどうぞということで静寂読書室があるが、全体としてにぎやかな図書館として、利用案内にも「会話のできる図書館」と書いている。そうした図書館は全国でもほとんどないので、来られた方はびっくりするけれど、そういうふうに静かに読書したい方と機能を分けてやっていることで特段問題になることもなく、利用者の方もちょっと活気のある形で利用していただいているので、場所的に考えてよかったなと感じている。

ユニバーサルデザイン、バリアフリーについては、オーテピアの施設を作るときにしっかり議論をしてきた。サービスを提供する面においても、そこは基盤となる部分として全職員がしっかりとやっていく。

外国人の話もあったが、高知県の在住外国人は6,500人位になっているので、ほぼ県民の100人に1人という時代になってきている。そこもある程度、標準的な部分として進めていかなければならない。

取りこぼしのないサービスという話で、全域、全方位、何とか全職員挙げてサービスを提供しているので、

また叱咤激励もいただきながら、さらなる充実をさせていきたい。

(委員)

この説明を聞いて、網羅されていて、非常に皆さんの熱のこもったすごい計画になっているといつも思う。おそらく皆さん持っていらっしゃると思うけれど、大らかに伸び伸びと、自らわくわくしながらこの計画に取り組んでいくという気持ちが大切。この計画があるから、KPIを目指してこうやらなきゃいけない ToDo になったらすごくしんどいと思うので Will というか、わくわくしながらこの計画を進めていく感じだったらよいなと思って、私もそれを応援していきたい。

参考に4点話をしたい。

1点目は、図書館を自分の本棚と捉えてもらうことの大切さ。私は家の前にすぐ町の図書館があるので、図書館は自分の本棚だと捉えている。自分の家に置ける本棚という限界があるので、図書館があるのはすごく自分にとっての資産だと思う。そういう意味では、図書館は町のストックであるし、資産だと思う。これは改めて、今日の説明を聞きながら感じたところ。今日の報告でも、町の図書館が自分の本棚だと感じられる取組はたくさんあった。移動図書館や出前講座は、図書館との物理的な距離を縮めていく取組で、積極的に進められているので非常にすごいことであるけれど、それと並んで、もしくはそれ以上に大事なものは、もしかしたら心理的な距離を縮めていくことなのかと思った。

これまでも十分にいろいろされていると思うけれど、図書館は単なる公共施設ではなくて私の本棚なんだというように、知的な生活のインフラみたいな形で捉えてもらえるような、心理的な距離の近い図書館にぜひ、なっていたらと思う。

2点目は、生成AIと図書館の関係性について。これについては、先日のサービス計画推進委員会のほうでも話題に挙がったようだ。AIは私も最近よく仕事で活用するけれど、AIが提供する情報は正確さがなかったりするので、そういうものを検証や補完する場として、図書館はその役割が果たせていけるかと思う。もう1つは、やはり問いを立てる力、サービス検討委員会の中でもあったプロンプト、問いを立てる力、生成AIに問いを入れることにとどまらず、自ら考えて問いを立てていく力を育てていく場に図書館がなっていってほしいと思っている。問い方や考え方という思考のナビゲーター的な部分を、図書館が担ってほしい。

3点目は、ビジネス支援という立場で、働く世代や事業者への情報支援。先日、ある経営者を訪問して取材をさせてもらったが、その経営者が感じている経営課題は、まさしくここにも書かれてあった人口減少。一部、地産外需もされているけれど、基本的に高知県内のお客様を対象にしている。人口減少に対応せず普通に仕事していたら売上げも下がっていくので、その経営者は業界を取り巻く状況についての確かつ合理的に情報収集し、打つべき手をしっかり打って行動していた。非常にすばらしかったと思うけれど、こういうふうには、中小企業や小規模事業者は、外部環境の情報を的確に手に入れることがなかなか難しい。だからこそ、図書館のビジネスレファレンスが、非常に大事な価値を発揮することを改めて感じている。ぜひ引き続き、事業者や働く世代への情報支援をお願いできたらと思っている。例えば、高知県に特徴的な業界もあると思うので、その業界を取り巻く統計や業界資料をあらかじめ整理しておくことも、図書館としてできるだろうし、それを地域経済の基盤強化などにつなげていくようなこともできると思う。

最後、4点目は概念的な話になるが、ビジネスを支援しているときによく登場するのが、商流や物流という言葉。今日の皆さんの話を聞いていると、商流・物流ではなく、知流という言葉がふさわしいかなと思った。最近、ビジネス上も、商流に関しては双方向のマーケティングという形で、SNSを活用して盛んに行われるようになっているが、基本構造としては、ビジネスの場合は川上から川下へ物や情報が流れていく形になっているけれど、今日ご説明いただいた図書館ネットワークの話などは、おそらく知の流れという話で、知流と

ということになると思う。現時点では、オーテピアから地域の図書館、学校図書館への一方通行かもしれないし、持つものから持たざるものへの流れという形で、情報を提供するフェーズだと思うが、今後は、双方向の知の流れを作っていただくように、次の計画などで考えていただけると、地域との知の交流がより豊かになっていくのではないかと思う。

#### (事務局)

生成AIに関しては、インターネット上には偽情報が非常に多く流れており、さまざまな情報の中で、それは本当なのかということもいろいろと言われている。本に関しては、出版社のほうで一定、ファクトチェック的なものが行われている。インターネットで調べたらぼんと出てくるので、それでよいというのではなく、特にインターネットでは、検索するキーワードによっては、同じようなものがどんどん出てくるので、一見それが汎用性を持っているように勘違いをしがちということも含めて、図書館の情報の活用術の中で、ファクトチェック、一定の真偽を見極めるところも重要ということで、リテラシーとして盛り込んでいけたらという発想を持っている。

いわゆるスクリプト、AIに命令を出す前にどういうものを先に指示しておくのかによっても、出てくる内容が大きく異なるということでは、嘘の情報をさも本当のことにように変えていくというのも出てきており、知らない方はただ鵜呑みにしてしまうところもあるので、こういう間違え方があるというのをまとめて、通常の情報リテラシーの中にそういう要素を一定入れ込んでいけたら、非常に効果的ではないかと考えるところはある。

あと、心理的な距離を縮めるという部分に関しては、高知市で言えば、移動図書館では病院や施設も回っていて、なかなか外に出られない、外出許可が下りない状況で本が借りられないという方のところまで届けることもやっている。敷居を下げるというのは、オーテピアを建てる時から目標になっていて、バリアフリーもその一環であり、会話ができる図書館というのもその一つなので、図書館は堅いところでちょっとかしまって行かないといけないという意識はできるだけ下げたいと考えながらつくった。そうは言っても、まだまだ抵抗はあると思う。今、中高生は試験勉強のために来ていて、敷居は比較的下がっていると思うが、あまり図書館の本を利用されていないように見える。せっかく来ているので、図書館の本も利用してもらえようという関わり方が重要だと思っている。若い世代にそうした図書館の使い方がどんどん広がっていき、賢い使い方をしていただければありがたいと感じた。

#### (委員)

この資料をいただくたびに、本当に頭が下がる思い。

今回も動きのあった箇所が多く、いろいろ考えてやってくれていると思うし、新規の事業が立ち上がった、検討中だったものが実施されたりして、本当に実効性があり、すごく頭が下がる。

今日も、館内を見ながらこの会場に上がってきた。例えば、資料にも出ているように、地元サッカークラブとの協力でユニフォームが展示されていた。拝見したらサッカー関係だけではなく、スポーツのいろいろな本が並んでおり、展示がすごく洗練されていて、子どもたちも大人も見やすく、ちょっと見てみたい、手に取りたいと思わせる展示の方法がすごく工夫されていると感じた。

ティーンズ・サービスのビブリオバトルも、私はすごく推している。ティーンズ部のメンバーが減少していることに対しても、新しいアプローチをされているという報告があり、ありがたいと思った。卒業してもOBやOGとして、すごくすてきな本の読み方や、アプローチができるお子さんが関わっていけるような方向で進んでいけたらよいと思った。

それと、教育研究所や学校などの現場に出かけて、すごくPRをしてきている。学校や役所はブラックだったりするので、新しいところにアプローチする職員の方は本当に大変だと思う。そんな中で、現場へ出向き、こういうサービスがあるよ、こうしたらもっとこういう利益があるよということを啓発することで、そこから本当に敷居が低くなり、新しい芽が出てくることがある。先ほど、人的な面で余裕を生み出すといった話もされていたので、今のうちに現場へ出かけて、こういうサービスがあり、こういうふうにしたら自分たちにも利益があるということをごんごん広報していただきたい。そうして広めていけば、現場に出なくても、周知がだんだんと広がっていくのではないかと思います。スマートシュリンクということも言われているので、少し余力のあるうちにどんどんやっていただきたい。

それと、先日、新聞が何かで読んだけれど、図書館の蔵書数が多い地域は、高齢者の要介護リスクが低いという研究結果が出ていた。図書館が提供する病気の予防や健康維持の方法が影響しているのかもしれないし、こういうオーテピアみたいなのがあったら、足を運ぶ楽しみがある。特に、高齢の方も、ちょっと綺麗にメイクして出かけようという楽しみがある。また、出かけることができない、来館困難な方に対してのアプローチもしてくれているけれど、高齢者施設へのアプローチはどうなのか。移動図書館がそれに該当するのか。そういうものがあれば教えていただきたい。高知では高齢者へのアプローチがすごく必要だと思う。

それともう1つ、子どもたちへのアプローチで、アンケートもいろいろな方を対象にしていますごく大事なことだと思うが、これからの高知を担う子どもたちへのアンケートも大事なのではないかな。県の子ども読書活動推進協議会でもアンケートをするかと思うが、実際に読書離れしている子どもたちがいる中で、子どもたちへのアンケートということも、これからやっていただけたらと思う。

私の孫がこの頃、よく折り紙を折って持って帰って来る。これどうしたのと聞いたら、学校の図書室で図書の先生が教えてくれるらしい。孫は体を動かすほうが好きで、休み時間にはドッチボールをしたり、体を動かしてるのかと思っていた。暑いせいもあるのかもしれないけれど、少し前から休み時間によく図書室へ行って、その先生に折り紙を教えてもらっており、すごくすてきなことだと思った。学校の図書室も、本を静かに読むところ。そして、本を借りるところというイメージがあるけれど、いろいろな楽しみ方、いろいろな図書室の利用の仕方があって、それで図書室や本への敷居が低くなる。孫は、分館や分室へ親と一緒に本を借りてくることはあっても、残念ながら学校の図書室から本を借りてくることは少ない。それでも図書室へ行っていろいろな経験をすることはすごくすてきだと思う。分館・分室や学校図書室の支援員さんの研修などもあると資料に書いているし、話の中でもあったけれど、その中で一方的に研修を受けるのではなくて、うちの図書室ではこんなことしてますという実践の交流の場にもなれば、それが貸出数につながらなくてもよいのではないかと考えている。その中で、こういう面白いことしているよとか、うちはこんなことをやっていると、こういう悩みがあるといった実践の交流みたいなことがすごく大事なので、その辺りの研修をお願いしたいと思った。

それと、子ども関係で言うと、6月13日(金)に NHK で放送された「“絵本王国” 高知」によると、高知にはたくさんの絵本作家の方がいる。高知出身の柴田ケイコさんや田島征彦さん、田島征三さん、土佐清水市在住のひさまつまゆこさん、脳性まひのお子さんがある、「おなかのボタン」という医療関係の絵本を書いた、高知市在住の平田エミさんなど、高知出身や在住の絵本作家さんが結構いらっしゃる。近くのNPO高知こどもの図書館や、絵本のお店のコッコ・サン、そういったところでワークショップをやっているということだったので、いろいろなところと連携して、任せる部分はそういったところに任せ、オーテピアは協力という体制をとることもできるのではないかと考えて見たことだった。

先ほどから話に出ているスマートシュリンクについて、知事の話を書く機会があった。このまま放置しておくと、2050年までに県内では25市町村が消滅する可能性がある。去年の出生数は3,000人と少し。総人

口はもう65万人を切り、まだしばらくはこの減少傾向は続くだろう。私は南の方に住んでいるが、地震の関係もあって本当に子どもが少なくなっているし、JAや銀行などもどんどん統合され、消防署も少し遠くへ移転し、人口減少の波が押し寄せてきている。

もちろんオーテピアも、優先順位をつけて事業の統合や縮小が行われると思うので、そういう情報も流してほしい。あと、何ができるのかというところで、出生数の減少の大きな要因としては、若年女性の転出があるらしい。婚姻率が下がっているということもあるし、若い方が少なくなっ、さらに女性も転出してることです。いろいろな考えると、オーテピアやこの街を舞台にした婚活の取組などができないのかと思ったりした。ここは本当に素敵な場所だし、プラネタリウムもあるので、そうした取組ができればよい。

子どもに関わってきた立場からすると、子どもが少なくなってきたことが本当に悲しいので、これから少しでも子どもが多くなればと思う。

知事によると、令和9年までに若年人口の減少傾向に歯止めをかけ、令和15年頃には令和4年の水準まで回復させたいということだった。それに向かって私たちもお手伝いできたらと思う。

いろいろ言っただけ、オーテピアの職員の方の労働環境がブラックにならないように、若い方も結婚して子どもを産んで、子どもたちと一緒に食事をしたり、子どもたちと一緒に楽しめる働き方ができますようにと思っています。本当にありがとうございました。

#### (事務局)

まず、高齢者施設などへのアプローチについて。市民図書館の移動図書館は、ひと月に170か所以上巡回をしている。巡回場所はスーパーなどもあるが、社会福祉系の施設や病院も回っている。月1回とはいえ、非常に楽しみにしている方もおり、施設の敷地内であれば、巡回の機会に外へ出て借りることができる方もいらっしゃる。車椅子の方もたくさんおり、そういった方が本を見て楽しむ貴重な機会になっているのではないかと考えている。

次に、学校の図書室について。今年の4月から高須小学校とやりとりをする中で、学校の図書室の活性化をしたいということで、学級ごとに本棚を設置している学級文庫に置く本を子どもたちが学校の図書室へ借りに行き、学校の図書室の本が少なければ、高須分室を主体にオーテピアからも本の貸出しをして充実させる。そうする中で、学校の図書室の存在感を再認識してもらい、本を利用する流れをつくっていくという取組を始めた。うまくいけば、他の学校にも広めていきたいと考えている。

#### (委員)

私と会長は、サービス計画推進委員会の委員でもあるけれど、毎回、この図書館協議会でご示唆をいただいており、3期に向けて勇気づけられる話がたくさんあったので本当にありがたい。

電子書籍は利用の難しさがある。世間一般で、例えば、証券会社で自分の株を勝手に売られたといったことがあると、2段階認証だとか、電話がかかってきて電話に出ると番号が読み上げられて、その番号を入力しないと接続できないような仕組みもあるなど、最近は、私も面倒くさくてログインしないことがたくさんある。ご指摘のとおり、子どもが使えるような仕組みではなくなってきた。全員の子供が携帯電話やSNSのアカウントを持っているわけではないので、そうなる電子書籍をどのように利用してもらうかは、オーテピアとしても非常に大きな課題ということ。

短期的にこうすればということはあるけれど、長いスパンで言うと、安全性とログインのしやすさは根源的な課題。私は大学の情報学群に籍を置いているが、インターフェースとしては根源的な課題で、これは軽々には解決しない。世界を取り巻く根源的な難しさで、これをいい加減にやると、電子書籍をダウンロードして売

ったりということもあり得る。善意でやっていた時代もあったが、漫画を勝手にアップロードして読ませる人もいて、逮捕者が出たりしている。大学の講義資料の関係で、「CLR」(大学学習資源コンソーシアム)という団体や「SARTRAS」(授業目的公衆送信補償金等管理協会)とも少し関係があって、その辺は利用と著作権を守るバランスが非常に根源的な問題なので、そうしたことは今後、サービス計画推進委員会の中でも議論させていただきたい。

次に、コンパクトで質の高い取組ということは、実はすごくありがたい。第2期サービス計画は残り2年しかない時期で、資料のとおり、サービス指標は達成が難しい項目がいくつかある。サービス計画推進委員会の委員からは、少子高齢化の影響もあるのではないかという意見があり、人口の変動に関する要素を入れて再評価することもあって良いかと思う。大学では志願者数の増減を分析していて、18歳人口を考慮しないと、どれだけ努力しても志願者が減ったということになってしまう。大学としてその魅力づくりがうまくいってるかということと、実際の志願者が減ったということは分離しなければ、さまざまな指標が正当に評価できない。そうした観点から、コンパクトで質の高い取組ということでは、質はどのようなかという再評価を2期の終了に向けて検討できたらと思った。

ボランティア、アクティブシニア層の話も非常に参考になった。オーテピアのサービスの充実度に比べて、(市町村の図書館では)とにかく人手が足りていないが、一般的な行政の組織なので人員をなかなか増やせない状況の中で、ボランティアを考えることも非常に大事。特に、市町村図書館支援の枠組みの中で、ボランティアの方々にどう協力していただくかという仕組みを示せば非常に効果的かと思った。スマートシュリンクで消防の広域化などを検討する中で、広域ボランティアなどがあっても良いかなと考えた。「〇〇市町村の図書館のボランティア」の枠組みでは人口減少に耐えられないこともあるので、高知県立図書館の支援も得ながら、広域ボランティアのようなものを整備できたら良いと考えた。

楽しい図書館ということは図書館の基本なので、県立図書館長からも話があったが、昔の県立図書館をもう一度思い起こして、もう1歩前に進めて行きたいと思った。

また、県民の100人に1人は外国人という中で、いかに楽しい図書館をつくるかは非常に難しい課題。ずっと高知にいらっしゃる方だけではなく、移住して来た方や外国の方にとっても楽しい図書館をつくることは、なかなか重要な課題であり、やりがいもある。

それから、私の本棚という話は、DX(デジタルトランスフォーメーション)を用いて、公共図書館でありながらパーソナライズできるのではないか。大学図書館の先導的なところは、入学してから借りた本のリストが全部残っていて、学籍番号を使うとパーソナライズでき、まさに私の本棚のような使い方がある。最初の説明のところに、分館・分室も含めた除却の問題があったけれど、昔借りたことがある人に、除却になる本の譲渡希望を打診すれば、私だったら取りに行く。図書館が本棚という視点は、今後に向けて重要な意味があるし、心理的距離という観点からも非常に良いことなのかなと。

もう1つ、スマートシュリンクについての話もあったが、例えば、人口減少に対応する経営など、スマートシュリンクへの対応そのものを、オーテピアが展開するビジネス支援にもリンケージできたらすごく良いだろうと思った。行政のノウハウがどこまで民間で通用するかというのはあるが、又特に、小規模な民間事業者の皆さんにご利用いただけるのであれば、それは非常に価値があるのかなと。

あと、知流の話で気づきがあったのは、市町村図書館との相互交流ということで、上流・下流という視点は割と強固だけれど、それが相互交流のようになっていけば、よりよい市町村図書館支援にもつながっていくのかなと。

それから、展示の仕方や活動など褒めていただいた。図書館はいろいろノウハウもあるけれど、その辺りを市町村図書館と共有するだけでなく、今申し上げた民間の事業者とも共有できたら、ビジネス支援の枠

組みも広がることを感じた。

あと、重要な示唆として、子どもたちへのアンケートがオーテピアのサービスを推進する中であまり強調されていなかったが、一般利用者の枠組みにはなるけれど、次世代の子どもたちへのアンケートという視点は、子どもが大きくなって図書館を支えてもらわないと持たないということもあって非常に重要。

あと、人員の問題は、先ほどのボランティアの話も含めて、サービス計画推進委員会の中でも考えていきたい。

本は借りないけど図書館に来ている人の話もあった。先ほどの話の続きになるが、そうした人の活動内容を評価してもよいのか、オーテピアのゴールをどう設定していくかという観点からも少し考えていきたい。

最後に婚活の話が出た。オーテピアで婚活イベントができるのか、するかどうかは別にして、期待の大きさという意味では非常にうれしく思った。高知県・高知市を盛り上げるためには何でもするというくらいの勢いで、3期に向けて進んでいってほしい。

(委員)

コメントという形で、いろいろとご指摘いただいたとおり課題山積で、今後の活動は非常に困難なことが予測されるけれど、県のスマートシュリンクを進めるという方針は決まった。簡単に言えば、こういう枠組みが設定されたということは、考え方によっては、自分たちのすべきことを考えるのが、容易になるとまではいかないけれど、しやすくなったのではないか。スマートシュリンクを進める中で、今までのサービスを上回るサービスを目指す。そのために力をつけて知恵を絞り、汗をかく。そういう非常に明確な行動プランが見えてくるのではないかと思う。その際、やはり一番大事なのは、シュリンクという言葉が表すように、確かにいろいろな面での縮小は避けられないけれど、県民・市民、すべての人々の心までシュリンクさせてはいけない、そのことが一番肝心だと思う。なので、そういう形で今後の活動プランとなる、新しいサービス計画を考えていただきたい。

それともう1つは、さまざまなAI技術、情報関連技術の進歩で、これは徹底的に活用していかざるを得ない。

それから、図書館というのはかなりの大きさの建物を持っていて、それを自由に使えるというところがある。人口減少、高齢化が進行する中で、その物理的な建物についても、今までにないような活用の仕方ができるのではないか。そういうことも考えていただきたい。

極めて抽象的な話しかできないが、具体的なことに関しては、今後いろいろと話し合う機会があると思うので、私の感想はここまでとさせていただきます。

議事(2)その他

(委員)

事務局は本日の委員からの意見を、サービス計画の進捗管理や、今後の図書館運営に生かしていただきたい。

12時00分 協議終了

令和7年度 第1回 高知県立図書館協議会・高知市立市民図書館協議会出席者名簿

令和7年7月10日(木)

オーテピア 4階ホール

○委員

役 職 等	氏 名	備考
高知市立朝倉小学校長、高知県学校図書館協議会会長	高橋 祐	欠
高知市一宮ふれあいセンター長、元小学校長	上村 国之	
横浜小学校区青少年育成協議会 代表推進委員 元高知市青少年育成協議会理事	西尾 敦子	欠
津野町教育長	久寿 久美子	
フリーアナウンサー、子育て支援員 第四次高知県子ども読書活動推進計画策定委員	花房 果子	
元高知市保育園長	神野 万里	
特定非営利活動法人こうち企業支援センター理事長	田村 樹志雄	
高知大学名誉教授	加藤 勉	
高知工科大学情報学群長	篠森 敬三	
特定非営利活動法人高知市身体障害者連合会会長	中屋 圭二	

○事務局

所 属 等	職 名	氏 名	備考
高知県立図書館	館 長	杉 本 幸 三	
	副館長	岡 村 祐 人	
	専門企画員(司書育成・サービス推進担当)	尾 形 千 晶	欠
	企画調整課長兼チーフ(企画調整担当)	西 岡 政 雄	
	チーフ(総務担当)	吉 永 伸 子	
	チーフ(図書利用担当)	谷 岡 祥 子	
	チーフ(情報資料管理担当)	渡 邊 哲 哉	
	チーフ(支援協力担当)	鈴 木 章 生	
	企画調整課 司書	八 田 裕 子	
	企画調整課 司書	上 岡 真 土	
	企画調整課 司書	和 田 香 織	
	企画調整課 司書	南 昇 平	
企画調整課 主任	那 須 真 紀		
高知市民図書館	館 長	小 新 貴 士	
	副館長	横 川 良 明	
	図書利用担当係長	川 村 紀 代	
	図書利用担当係長	川 村 美 里	
	図書利用担当係長	渡 辺 佑 介	
	資料管理担当係長	徳 平 晶	
	管理担当係長	桑 瀬 絵 美 子	欠
高知市 図書館・科学館課	課長	弘 瀬 友 也	